



この交流が自身にとって有益であったこと、交流プログラムを通して、有益な情報や知識を得ることが出来たと回答していました。また、8割を超える学生が、オンラインでの交流に満足し、今後の海外長期留学への意欲につながったと回答していました。また、広島

大学でのインターンシップや大学院進学に関する問い合わせもあり、このプログラムが更なる国際交流を生むことが期待されます。実際に、プログラム修了後に2名の広島大学の学生がインドで研究インターンシップを行うなど、国際交流の広がりを見せています。

## さくらサイエンス・ハイスクールプログラム JST、オンライン大学訪問〜筑波大学〜

科学技術振興機構(JST)は、6月19日に筑波大学と共に、第4回さくらサイエンス・ハイスクールプログラム「オンライン大学訪問〜筑波大学〜」を開催した。オンライン大学訪問は、JSTが海外の高校生を主な対象者として、日本の大学へのリモート訪問体験をオンラインイベントとして提供し、日本への関心と留学意欲の向上を目的として昨年度より実施しており、今回は5月22日の名古屋大学に続き開催するものである。

今回のプログラムでは「Interdisciplinary Engineering」と題し、現在4つのコースに分かれている科学技術系の外国人留学生向けのコースプログラムについて、将来的な総合科学技術系研究をにらんだ、いわゆる「分野を包括する」英語で受講できる基礎学習について「サイエンスティーツーの特性」を交えて詳しく解説した。

冒頭、永田恭介筑波大学学長(国立大学協会会長)が歓迎の挨拶の中で、200を超える関連研究機関があるサイエンスシティの中心に大学が存在することや、大学のスローガンである「Imagine the future」などについて言及し、このイベントを心より楽しんでもらうようメッセージを述べられた。

また2つの講義の間に「Special Movie」と題して、土井裕人助教(人文社会学系)より「Humanities Expanding with Technology」特別ビデオ講演が行われた。テクノロジーを駆使してプラトンの「ティマイオス」の分析やロボット研究を通して、「専門分野をまたぐ」インターディシプリンリ「研究が可能な大学」の素晴らしさをアピールした。

MCとビデオによる大学紹介の後に、講演「スペシャルトーク1,2」が実施された。トーク1の大澤博隆助教(システム情報系)による「Human-Agent Interaction」では、サンクラスのような視覚障害者をサポートするツールを例に、同研究室に所属する学生とのトークを交えて、将来の社会の中で有用な人工サポートシステムに関する新たな研究分野をわかりやすく解説した。

今回のオンライン大学訪問のプログラムは筑波大学が自らの特徴を活かし、発表者や研究室学生をステージに招いての座談会と動画を組み合わせた内容で実施され、視聴者である海外の高校生に対しライブ感と、相互交流の雰囲気を提供することが出来た。また、ステージはグリーンバックという手法を利用し、登壇する先生や学生の背景を発表内容にあわせて変更するといったテレビ番組のような構成で、視聴者を実現した。MCを務めたシャー・勝間田マハディ氏(国際室、国際戦略担当)の軽妙なトークも奏功し、多くの視聴者が終了まで参加し、延べ数で前回を大きく上回る5301名が参加した。



講演する櫻井教授

挨拶する永田学長



発表内容をバックに懇談

今回のオンライン大学訪問のプログラムは筑波大学が自らの特徴を活かし、発表者や研究室学生をステージに招いての座談会と動画を組み合わせた内容で実施され、視聴者である海外の高校生に対しライブ感と、相互交流の雰囲気を提供することが出来た。また、ステージはグリーンバックという手法を利用し、登壇する先生や学生の背景を発表内容にあわせて変更するといったテレビ番組のような構成で、視聴者を実現した。MCを務めたシャー・勝間田マハディ氏(国際室、国際戦略担当)の軽妙なトークも奏功し、多くの視聴者が終了まで参加し、延べ数で前回を大きく上回る5301名が参加した。